

緑が育つ人が育つ

春の「緑の募金活動」

四月二十日(日)、春の「緑の募金」活動の一環として、高知市で「街頭募金」を実施しました。当日、街頭募金出発式が行われ、浅川局長が祝辞を述べました。(写真上)その後、街頭に出て「緑の募金」活動も行いました。(写真下)

今年「緑の募金でふせこう地球温暖化」をスローガンに、五月三日まで展開しています。全国緑化キャンペーン実施要領には、「緑の募金活動は、国民運動として一層の進展を期待されている」とあります。

このため、広く県民の皆さま方に、森林整備の重要性や木材利用の意義などに理解と関心を深めて頂くことは大切です。そのためにも、緑の募金活動は大きな役割を担っています。引き続き取り組みにご協力を。



誌上 森林環境教育

「樹木の匂い」

小学校高学年を対象に、校庭や公園、森林で樹木が出している匂いを体験する。

樹木の葉や枝、その木材(板)から匂いが出ていることを理解する。

それらの匂いがいろいろな働きをしていることを知る。

葉の匂い

葉が匂う身近なものでは、クスノキ(クスノキ科 写真上)、カツラ(カツラ科 写真中)、クサギ(クマツツラ科 写真下)など。

この外にも、サンショウ(ミカン科)、クロモジ(クスノキ科)など。

(大日本山林会 日本の森林と林業より)



「鎮守の森」って

「鎮守」を広辞苑で調べると、その地を鎮め守る神。全国に存在する神社とお寺の数は、それぞれ8万数千、コンビニ5万弱、中学校は全国に約1万なので、平均して中学校区あたりにそれぞれ8つずつ神社とお寺がある。

神社の境内は、子どもたちには遊び場で、草野球や、夏祭りを楽しんだ記憶。日本の神社やお寺は「自然」との繋がりが深く、祭りや様々な年中行事からも地域コミュニティの中心。

「鎮守の森」は、戦後、急速な都市への人口移動とコミュニティの希薄化、そして経済成長へのまい進の中で、人々の意識の中心から一時的に薄れていった。

経済が成熟し、また地域コミュニティのつながりや自然との関わりの重要性が認識されるようになった今日、もう一度その価値を再発見する時期に。自然と信仰が一体になった鎮守の森を再発見・再評価していく。その可能性を探る試みとして鎮守の森(身近な森)セラピー、祭りや地域再生・活性化といったテーマについて調査研究や実践に取り組む。

(千葉大学教授 広井良典 森林インストラクター会報 2014 4月号)

編集後記

風がおる5月 山々にも鮮やかな若葉。
過ぎしやすい季節に。体調と相談、少し歩いてみるか、それも良い季節に。